海を守る

裾野市内中学校
薄さん

私の祖父母は西伊豆の海の近くに住んでいます。夏休みには祖父母の家に行き、海へ遊びに行きます。水平線の彼方まで広がり碧く美しく輝き、心身に癒やしを与えてくれる、そんな伊豆の海が私は大好きです。ふと辺りを見渡すと、残念ながら目に入ってくる存在があるのです。それは「プラスチックごみ」です。世界的にも大きな問題となっている、このごみは減るどころか毎年増えているように感じます。幼いころはあまり気にせずにいたのですが、環境について学んだりする中で、海を汚される不快感と、「このごみはどうなるのだろう?」「何か自分にできることはないのだろうか?」と考えるようになりました。そこで、海に浮かんでいるごみの行方を調べてみることにしました。

まず、海に捨てられたり、川から海へ流れ出たりしたプラスチックごみは潮に流されます。その大半は「太平洋ごみベルト」と呼ばれるハワイ北西部ミッドウェー環礁付近の海域に運ばれます。広さは百六十万平方キロメートル、日本の面積の約四・二倍です。このごみベルトは現在も急速に拡大し続けていて、ごみの総量は約一兆八千億個、約八万トンもあるそうです。これは、海上に浮いているものの量で、ごみ全体の三〇%に過ぎないのだそうです。つまり、残りの七〇%は海中に沈んでいることになります。計算すると、海に流れ込んでいるごみの総量は約六兆個、およそ二六万七千トン。私の住む三島市の、二〇二一年度ごみ年間総排出量は三万二千五百七十八トンだったので三島市のごみ八年分以上のごみが海にあることに気づきました。

海岸にクジラやイルカ、アザラシ、ウミガメが打ち上げられ、胃の中を調べてみるとプラスチックごみが発見されるというニュースをよく目にします。これは本当に胸が痛みます。何も分からず食べたものによって命が失われるのです。本当に悲しいことです。

海岸プラスチックごみの問題は、量だけではありません。その大部分が〇・〇五〜〇・五センチほどの「マイクロプラスチック」であることです。潮の流れによって海中のごみは小さな破片に分解され、マイクロプラスチックごみとなり、魚や鳥の体内に蓄えられ、海の生態系への悪影響が心配されます。さらに、その魚を食べる人間への健康被害も懸念されているのです。

この状況は、日本だけのものではありません。他の国ではどんな対策をしているのか、興味がわきました。アメリカでは、プラスチック

ストローの廃止、一部の州ではレジ袋の使用禁止が行われているそうです。ヨーロッパのＥＵ加盟国では、使い捨てのプラスチック容器の使用禁止、ペットボトル回収率九〇％を目標に活動しているということを知りました。では日本はどうなのか？調べると、循環経済への移行と３Ｒ＋Renewable が出てきました。リデュース・リユース・リサイクルの３Ｒと、再生可能な循環社会を目指して資源消費の最小化、廃棄物の発生抑止を実験しようとしているのです。

わが家でもさまざまな対策をしています。まずはエコバッグを持つことです。私も外出するときは、花柄のエコバッグを持ちます。二つ目は水筒の利用です。外でペットボトルを買うことも少なくなりました。水筒の氷はなかなか溶けないので、一日中冷たい飲み物が飲めます。ペットボトルをゼロにすることはできないので、購入した場合は中を洗い、キャップとラベルを取ってリサイクルボックスへ入れます。茶葉のパックを家で作って飲むと経済的ですし、おいしいです。シャンプーや洗剤なども詰め替えて使用しています。プラスチックを生活の中からなくすことは難しいけれど、減らすことはできるのだなと実感しています。

一人ひとりのできることは大きくありませんが、ごみを減らす努力をずっと続けることはとても大切です。「少しだけなら休んでもいいや」ではなく、自分の行いが地球の環境に結びついていることを忘れず、常に危機感を持って努力し続けることが重要なのだと思います。そして、ごみが目に入ったら拾って正しい場所へ持って行けるような人になりたいと考えています。

ごみ問題は、人類全体に課せられた大きな問題です。他人事と考えずに、行動できる仲間を増やしていきたいと思います。私も地球の現状から目を背けず、しっかりと考え、行動していきたいと思います。祖父母の伊豆の海がいつまでも美しくいてほしいと願いながらその努力を続けていきます。